

(報告)

野田市郷土博物館における 特別展「古墳文化のあけぼの(1700年前の野田)」について The Special Exhibition "Earliest Kofun Age of Noda" in Noda City Museum

金山喜昭
Yoshiaki KANAYAMA

はじめに

当館では平成2年10月16日から11月18日までの約1ヶ月間にわたり、市制40周年記念事業として特別展「古墳文化のあけぼの(1700年前の野田)」を開催した。今回のテーマは昨年開催した特別展「野田と貝塚(奥東京湾沿岸部における縄文前期黒浜期の貝塚文化)」に引き続き、野田地方史を再検討する意味で企画したものである。

当地方を取り扱った研究には、市山盛雄、佐藤真などによるすぐれた著書があり、地方史の研究を志す者にはバイブルのような存在であるが、考古学のように発掘の成果に基づき絶えず資料の再検討を進めてゆく性格をもつ学問分野においては、将来に余地を残すものであった。市内の三ツ堀遺跡、堤台松山遺跡は昭和30年代に当館によって調査がおこなわれ全国的に著名な遺跡として知られているが、近年にいたるまで更に多くの新知見もたらされ、新たな研究段階になりつつある。しかしながら今のところ、新資料を含めた当時の地方史についての研究例は少ないことから今回は野田地方の地方史を再検討することと併せて、新段階の地方史研究の一つの契機となり得ることを目指し企画した。なお、ここで述べる野田地方とは市内に限定せず、野田とその周辺地の東葛地方を指す。

1. 特別展の視点

特別展はサブタイトルのように「1700年前の野田」というように、特定の時期に焦点を絞った。古墳時代は4世紀から7世紀頃の約400年間に相当するが、それは政治・社会・文化等の各レベルにおいて幾つかの時期単位に分かれ、歴史的な変遷を辿る。「古墳時代」を全体的に語るためには、構成単位となる各時期ごとに、その歴史像を把握してゆくことが望まれる。つまり各時期ごとに検討を加え、それを相互に連結してゆくことにより「古

墳時代」の全体的な把握が可能となる。

特別展は古墳時代初頭の「五領期」(約1700年前)という時期に焦点をあてた。この時期は弥生時代の直後で、ヤマト勢力(畿内政権)が奈良方面に成立し、全国に国家的な支配領域を拡張する一方で、各地方の在地勢力との間で抗争が繰り返された激動の時代であった。当時の野田地方の様相をみることは地方史研究にとって有意義なことである。このことは野田に止まらず、他地域との比較や、また全国的な研究レベルにも応用が可能なものとなり得る。日本史研究の根底は地方史研究であり、それらの総体が日本史研究に発展的に止揚化してゆくものである。

実は、1昨年(1989年10月)の特別展「野田と貝塚(奥東京湾沿岸部における縄文前期黒浜期の貝塚文化)」についても同じ視点から実施をした。当時は地球環境が温暖化し海面の上昇により、現在の東京湾から北に約50kmほど内陸に海水が入り込み、海域沿岸部を中心とした一つの縄文地域社会が形成されていたことが、最近の共同研究により明らかにされた。特別展では共同研究の



*かなやま よしあき

連絡先 野田市郷土博物館

〒278 千葉県野田市野田370



成果に基づき野田地方と、更に奥東京湾沿岸部にあたる茨城県南西部、埼玉県東部、東京都東北部に対象地を広げ、当時の自然環境や縄文人の生活ぶりを復元し、展示活動を行った。

それに引き続き昨年（1990年5月）は埼玉県立博物館にて特別展「さいたまの海」と題する、やはり縄文前期の海進期における縄文人の生活・文化を取り扱った特別展が開催された。企画は数年前からのものということだったが、担当者との間で私達の調査・研究の内容や資料について協議もたれた。埼玉県立博物館の方の場合は全国的な視野から奥東京湾地域にスポットをあてたもので、そのため県内の資料以外にも全国各地の資料も出品された。当館の場合は野田地方の貝塚資料を中心としながら奥東京湾沿岸部全域に視野を広げたものであった。黒浜期という限定した時期における奥東京湾の自然環境と縄文人の生活の復元に焦点をあてた当館の調査・研究活動やその展示内容は、更に縄文前期全般における全国の貝塚遺跡と、奥東京湾の様子を描写するという埼玉県立博物館の調査・研究活動や展示活動に引き継がれたものとなった。また埼玉県立博物館では開期中に、日本第四紀学会との共催により、「奥東京湾における縄文時代の生活と環境」と題するシンポジウム（参加者200名）が行われ、研究者と共に多くの一般市民の参加者もあり盛況であった。更にシンポジウムの司会者の小林達雄氏が、その後テレビ番組の討論会（「プレステージ」テレビ朝日）に出演された折に、特別展と奥東京湾についての共同研究の成果について全国的に紹介がなされたということも付け加えておきたい。

つまり、博物館はその一面として情報の発信地という認識の上に立てば、例え規模の小さな地域社会型博物館からでも実行することは欠して不可能なことではない。

対象を地域内に絞り込まず、もちろん地域を対象としながら、広い視野を持ち隣接地域、更に全国的な位置づけを念頭においてゆくことにより、地域社会型博物館は地域単位の事象を調査・研究し特別展などに生かすと共に、全国レベルにおいて地域の位置づけを果たす役割を担っているのである。

2. 展示の内容

展示の趣旨は、古墳時代初頭におけるヤマト勢力の国土統一化が進められてゆく過程で各地方ごとにその対応の仕方は様々であったことを通じて、当時の野田地方の様子を明らかにすることであった。そのために当地方と、房総でもヤマト勢力と最も交渉関係の色彩が強いといわれる、東京湾東岸地方（市原、木更津など）と比較しながら展開した。

以下、順をおって展示コーナーの概略を説明する。

（房総最古の古墳）

古墳時代の最も早い時期に造られた前方後円形の古墳（神門3・4・5号墳）を紹介する。弥生時代のように一つの集落内に人々の階層の違いが生まれ出した時代から、古墳時代に入ると集落間で序列ができたり、いくつ

千七百年前の野田
古墳文化のあけぼのの文化
市制40周年記念特別展
主会：野田市郷土博物館
10/16(火)⇒11/18(日)
野田市郷土博物館

博物館セミナー 会場・中央小学校百年記念館

10/21 11:30 「弥生時代の暮らしと生業」
主会：野田市郷土博物館
共催：明治大学

11/4 11:30 「古墳時代初頭における東国の人々」
主会：大正大学
共催：野田市郷土博物館

11/11 11:30 「房総の古墳文化」
主会：野田市郷土博物館
共催：野田市郷土博物館

もの集落を統合し、一定地域を支配する有力者が現れたことを理解する。主な展示資料：市原市神門3号墳（土器、鉄剣、鎧、銅鏃、ヤリガンナ）神門4号墳（土器、管玉、鉄鏃、鉄剣、鎧、ヤリガンナ）など。

（房総の先進地域）

房総の東京湾東岸地方には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳などの多様で、規模も大きな古墳が目立ち、鏡、鉄製品、装身具などの副葬品が豊富にみられることから有力な首長層の存在がうかがえる。野田地方の比較地域として取り上げる。主な展示資料：市原市辺田1号墳（大刀、刀子、鉄剣）、市原市新皇塚（土器、管玉、鉄製品）、木更津市俵ヶ谷4号墳（鏡、管玉、ガラス玉）、富津市打越遺跡（布留式土器、土製品）など。

（東葛地方の地域性）

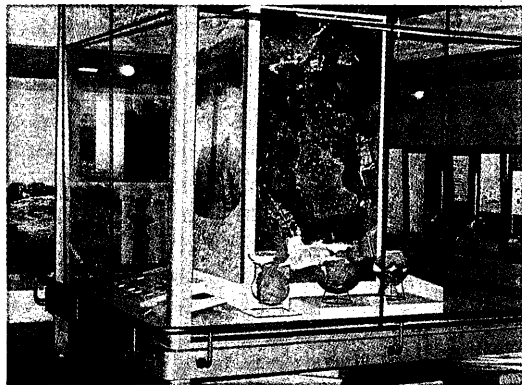
当地方の古墳は少数ながら方形周溝墓や集落が目立つ。土器は地元で作られた在地系のもの以外に、畿内や東海、北陸などの外来系の土器がみられることから、人々の往来が盛んであったことを理解する。主な展示資料：柏市戸張一番割遺跡（叩き目をもつ畿内系土器）、野田市南新田遺跡（S字状口縁の東海系土器、北陸系鉢）、松戸市諏訪原遺跡（畿内系壺破片）など。

（三輪野山向原古墳と北作I号墳）

2基の古墳を紹介することにより、東葛地方を支配した人物の存在を理解する。両古墳共に小規模な円・方墳であることからさほど有力な人物だったとは思われない。主な展示資料：流山市三輪野山向原古墳（土器、鉄剣、ヤリガンナ、ガラス玉）、北作I号墳（土器、銅鏃）など。

（方形周溝墓の発見）

今日、学術用願として定着している「方形周溝墓」は、実は野田で最初に発見され、「方形特殊遺構」と呼ばれ



た。最近調査された上三ヶ尾宮前遺跡をはじめ、当地方の方形周溝墓から集落の長の存在を理解する。主な展示資料：野田市提台松山遺跡（底部穿孔の壺）、同上三ヶ尾宮前遺跡（底部穿孔の壺）、松戸市稔台富山遺跡（底部穿孔の壺）など。

（集落の暮らし）

一般集落とは別に古墳に隣接する集落は被葬者と何等かの関連ある集落だったと考えられる。主な展示資料：柏市戸張一番割遺跡（鏡、銅鏃、ヤリガンナ）、沼南町経塚遺跡（直刀片、砥石、鉄製品、土玉）など。

（まつり）

弥生時代以来の稲作による生活が定着し社会が発展するにつれて、人々の信仰の在り方はそれまでの呪術的なものからカミまつりへと変化したといわれる。当地方のまつりが行なわれた遺跡を紹介する。主な展示資料：我孫子市我孫子中学校校庭遺跡（1・2号住居一括土器）、同日秀西遺跡（一括土器）など。

（東葛地方の五領式土器）

この土器は埼玉県東松山市五領遺跡より出土した土器器の一群を標式として命名された。東葛地方の土器を紹介することにより、五領式土器の地方色や、また製作技法を中心とした器形の変化や文様、器種の組み合わせの変化で時間的な移り変わりのあることを理解する。主な展示資料：松戸市殿平賀遺跡、同諏訪原遺跡、市川市須和田遺跡、同小塚山遺跡、野田市三ツ堀遺跡、同桜台遺跡など。

3. 開期中の状況

入場者総数は2769人であり、市内、県内ばかりか関東各都県や中には大阪から訪れた学生もいた。アンケート調査を行わなかったので詳しいことは分からないが、受付の担当者や私自身の印象からいうと市外の来館者が目立ったように思う。付近の柏、松戸、船橋などの在住者は新聞報道によって知ったといい、考古学専攻の学生や研究者は各大学、博物館などに送ったポスターを見て訪れたという。

まず、一般の来館者がどの程度、古墳時代初期についての歴史を理解し得たのだろうかということがあげられる。高等学校の教材日本史資料によると「大和政権は4世紀半ば過ぎに大和で成立したと考えられる」と説明されているが、今回はその様な教科書的記述を更に掘り下げて地方史レベルで展開したところに話題性がある。来館者全ての感想を聞くことは難しいが、私が説明をした人々から得たところでは、「古墳時代という言葉は知っていま

したが、実のところはよく分かりませんでした。これでよく分かりました「当時の野田は市原よりも文化が遅れていたんですね」「同じ千葉県でもヤマト勢力とのつながり方に差があったのですか」などというように、様々な反応を聞くことができた。こうした人達が特に興味を示したのは、鉄剣、太刀、装身具、鏡などの当時の権力者が保持していた古墳の副葬品や、関西や東海地方の影響を受けた土器についてであった。また土器については、土師器は縄文土器と異なりほとんど装飾を施さず簡素な作りをしている点も話題が集まった。市内在住の郷土人形のあるコレクターの方は縄文土器のように人にみせることを意識したものと違い、素朴なところが何ともいえない味わいがあるという。なるほどその人らしい民芸的発想だった。

考古学の専門的立場からの評価についてはまだ十分な意見を聞くことは出来ないが、県内の主要資料を展示した点が好評であった。借用資料のうちには未発表資料も多く、既に発表されたものについても倉庫にしまい込まれたままで非公開のものもあり、それらが一同に公開された意義は大きいとの評価をうけた。今後、これらの資料に基づき当地方の研究に寄与し得ることを期待したい。

また、一般の来館者と接していて気がついたこととして、展示品についてしばしば本物かどうかの質問を受けた。展示品キャプションにあえて実物と示さなかったからだろうが、しかしあえて実物であることを示さなければレプリカと思いがちなのだろうか。今日の多くの新設館では実物資料の不足を補うためにしばしばレプリカを製作し展示にあてる。そのキャプションには「レプリカ」「模造」などと明記している場合ばかりではなく、記号によって代用させており、一目では実物かレプリカかの判断がつきにくい場合もあり、いつのまにかレプリカが目が慣らされている。レプリカの製作技術も相当高度で外観ばかりでなく質量、重量までもよく類似している。今回展示した神門4号墳の土器は国立歴史民俗博物館においてレプリカが常設展示されている。しかしこちらは実物であると伝えると、来館者は一様に驚きの表情を示していた。しかも今回の展示品は全て実物である事を付け加えると更に驚きの反応を示した。こうした反応は正直のところ随分意外であった。どのような博物館でも実物資料を展示するという事は、展示の企画や内容などの問題とは別に、「博物館に行けば本物が見られる」という来館者の期待に応える意味で重要である。

話は少し余談になるが、よく一流の芸術家をはじめ一般人も人格形成を高めて行く上で、若い時分にはなるべ

く多くの国宝や重要文化財などの優れた文化財を見ることが大切だといわれる。博物館はまさにそうした場にもかかわらず、単にレプリカを代用させていては、「博物館に行っても本物は見られない」という烙印を押されかねない。来館者は何時でも本物を見たいという欲求をもち、また本物を見ることで心の安らぎが得られるのではないだろうか。どれほど優れたレプリカでも、それは実物との類似度においては評価されるだろうが、実物自体が持つ「もの」としての資料的価値には及ばないだろう。つまり一般の来館者は博物館では実物を見たいという基本的な欲求をもち、今日の博物館ではその様なことが十分満たされたものとはなっていないように思われる。とはいえ、レプリカには別の意味からの価値づけがあり、別段それを否定するつもりのないことを付け加えておきたい。

おわりに

今回の入館者は2764人であった。昨年の特別展「野田と貝塚」の2969人よりも僅かに少ないがほぼ同じ程度とみてよい。このようなデータをあげると、では成功したのかと問われることになる。入館者の数値は確かに一つの尺度になるだろう。しかしそのみが尺度ではないはずである。例えば入館者個々に及ぼした知的満足感の尺度は一つの方法として滞留時間を測定することによって可能かもしれない。昼食も食べずに4時間も展示物を丹念にスケッチしていた学生と、僅か数分で簡単に見た人とは、同じ1人でも知的満足感には大きな隔りがあるだろう。

今回の特別展の評価についてはまだ十分聞かれないが、僅か半年の準備期間の中で、資料や文献の調査からはじめ、シナリオ作成、借用資料の交渉、図録の作成、資料借用、展示等を通じて、野田地方の古墳時代初期の歴史性について見通しを立てたつもりである。今後の考古学や地方史の研究活動、また他の博物館等の活動の中で今回の特別展の成果がどのような展開をみせて行くのかを楽しみにしている。